



写真-1 揖保川左岸から宍粟橋および宍粟市役所を望む(令和3年6月撮影)

■ 米寿を過ぎた宍粟橋

写真-1 は、宍粟（しろう）市役所の東を流れる一級河川・揖保川に架かる宍粟橋を左岸側から撮影したものです。昭和9（1934）年3月に完成したこの橋（RC桁、L=93.6m、W=5.5m）は、一般県道537号田井中広瀬線（たいながひろせせん）の一部を構成していますが、すでに米寿を過ぎた高齢橋で、平成21（2009）年3月に竣工した真新しい宍粟市庁舎と好対照をなしています。

■ 川東往還を構成していた出石の渡し

かつて宍粟橋の上流には、揖保川舟運の起点として賑わった出石（いだし）の船着場と出石の渡し場（川幅51間5尺余≒94m）がありました。

この渡し場は、宍粟市山崎町鹿沢にあった山崎藩※1の陣屋の西約1kmに位置し、山崎と揖保川上流域を結ぶ川東道（川東往還）の一部を構成していました。元禄12（1699）年に記された『播州宍粟郡守令交代記』によると、山崎藩陣屋東方の清水口を出て、出石の渡しで揖保川の東岸に渡り、高所（こうそ）～中～神谷（こうだに）と北上して、野々上（ののうえ）村から杉ヶ瀬村に通じていたそうです。

山崎は、揖保川上流域と下流平野部の結節点に位置する交通上の要地にあり、山崎を中心に北、北西、南東、南へと道路が伸びています。



写真-2 山崎城跡紙屋門

※1 山崎藩：姫路藩初代藩主・池田輝政の四男輝澄を藩祖とする。慶長20（1615）年5月、輝澄の同母兄で岡山藩主の池田忠継が早世すると、忠継が

相続していた母良正院の遺領分 10 万石のうち播磨国宍粟郡 3 万 8 千石を分与されて鹿沢に陣屋を構え立藩した。寛永 17 (1640) 年に家老同士の対立が表面化しお家騒動に発展(池田騒動)、輝澄は改易される。約 40 年後の延宝 7 (1679) 年、大和国郡山藩より本多忠英が 1 万石で入封し、以後本多氏が明治維新までこの地を治めた。



写真-3 出石の船着場と高瀬舟(揖保川右岸堤防上に設置された説明板の絵から引用・加工したもの)
なお、この絵は郷土史研究家の下村哲三氏が提供されたものである。

■ 富士野鉾山の繁栄に伴い川西道が整備され、川東道の重要性は低下

江戸時代初期、揖保川の右支川・倉床(くらとこ)川の上流部にある富士野(ふどの)鉾山※²が繁栄し荷物の運搬が盛んになったので、寛永 8 (1631) 年に庄能〜三津(みつ)〜五十波(いかは)〜田井までの山裾を通る川西道に改められ、これに関連して田井〜杉ヶ瀬間の揖保川に渡し(田井の渡し: 現・井ヶ瀬橋付近)が設けられました。

それ以来、川西道が本通りとなって、三方谷・西谷・染河内(そめごうち)谷からの薪炭・板・木材・鉄などの輸送路として利用され、川東道および出石の渡しの重要性は低下しました。

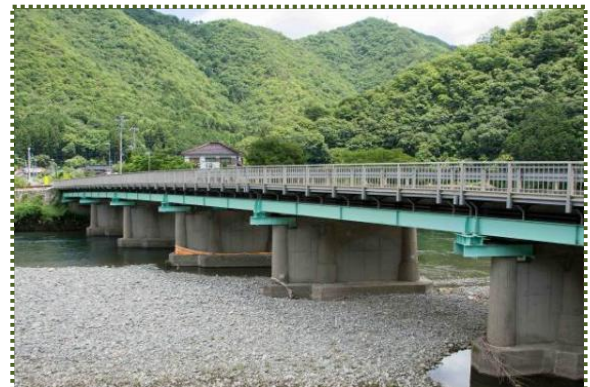


写真-4 国道 29 号・井ヶ瀬橋

この時、城下町の北東部に位置するところに新しく町ができました。富士野鉾山の繁栄によって町屋ができたので、「富士野町(ふどのまち)」と名づけられたそうです。貞享 5 (1688) 年の『惣町中地詰帳』(阿波屋文書)によると、南北と東西の町筋があり、家数は南北筋の東側に 8 軒、西側に 12 軒、東西筋は富士野町新屋敷として北側にのみ 16 軒がありました。この町は、明治 4 (1871) 年に山崎町の一部となり、現在の地名は山崎町山崎山田です。

では、なぜ川東道から川西道に改められたのでしょうか。奥筋から高瀬舟の発着する出石の船着場までの距離は、従来の川東道の方が短く、牛馬稼ぎの人たちも杉ヶ瀬村から釜ヶ岨(かまがそ)を通って野々上村に出る道をよく利用していました。しかし、釜ヶ岨は崖と川に挟まれて道幅が狭く、洪水で道が削られることもしばしばあって危険だったからだそうです。

しかし、牛馬稼ぎの人たちは川西道が本通りとなって以降も出石の船着場までの距離が短い川東道を通ることから、沿道にある野々上村としては、川東道も本通りであるのに道路修理は村負担なのは納得できないとして、釜ヶ岨を通行する人たちの村や、売荷駄賃稼ぎに関係のある出石問屋などに道路修復費の負担を要求しました。この争論は寛政 11 (1799) 年に起こり、他村の牛馬通行は禁止になっていましたが、文政 2 (1819) 年に争論が再燃します。

この争論は、関係する村々の領主が異なることから、大坂代官所に裁可を仰ぐことになり、文政 6 (1823) 年に大坂から出張してきた役人が、川西道が本通りであることを確認し、野々上村の言い分は退けられました。

川西道は、播磨国一宮（伊和神社）への参詣道としても重要で、山田町（現・宍粟市山崎町山田）と川西道との分岐点には道標（写真-5）が建てられました。これには「當国一ノ宮道是ヨリ三里北 寛政十一年末（ひつじ）五月日」とあります。

※2 富士野鉾山：揖保川の右支川・倉床川の上流にあった富士野鉾山は、江戸時代初期から銀・銅の採鉱が行われ、慶長（1596～1615年）の頃から特に盛んであったという。『播州宍粟郡守令交代記』に「其頃御方谷富士野銀山さがり荷物の運搬繁く」と記され、当時の盛況をしのばせる。銀のほかにも銅も産出していた。幕府の期待は大であったが、寛永期（1624～1644年）以後は漸次衰退した。現在も当時の山積みされた鉾滓が各所に残る。



写真-5 総道神社境内に立つ道標

■ 国道 29 号の重要な経由地・宍粟市山崎町

因幡街道は江戸時代に整備された脇街道の一つで、播磨国・姫路を起点とし、飾西宿（しきさいじゅく：現・姫路市飾西）を経て鶯崎宿（はしきさいじゅく：現・たつの市新宮町鶯崎）の手前の追分で北に分岐、山崎を経て揖保川沿いに北上し、戸倉峠を越えて因幡国・鳥取に至る街道です。

姫路と鳥取とを結ぶ国道の起源は、明治 18（1885）年内務省告示第 6 号「国道表」の国道 22 号「東京より鳥取県に達する路線」です。ただしこの路線は、姫路で現在の国道 2 号から分岐した後、龍野市（現・たつの市）までは現・国道 29 号のルートを通りますが、その先は現在の国道 179 号、373 号、53 号のルートを通して鳥取に至っていました。

明治 19（1886）年 11 月 9 日に現在のルートに変更されます。全線が指定区間（道路法第 13 条：国土交通大臣管理）です。

揖保川上流域への往還が川東道から川西道に移って以降、出石の渡し場の重要性は低下しましたが、この時のルート変更に伴い出石の渡し場跡に架けられた宍粟橋が国道に編入され、再びその重要性が高まりました。

そして、大正 9（1920）年施行の旧道路法に基づく路線認定では、旧・国道 22 号がそのまま国道 20 号「東京市より鳥取県庁所在地に達する路線」となっています。

昭和 27（1952）年 6 月 10 日に公布された新道路法に基づき、一級国道 29 号（兵庫県播磨郡余部村～鳥取市）として指定施行されます。

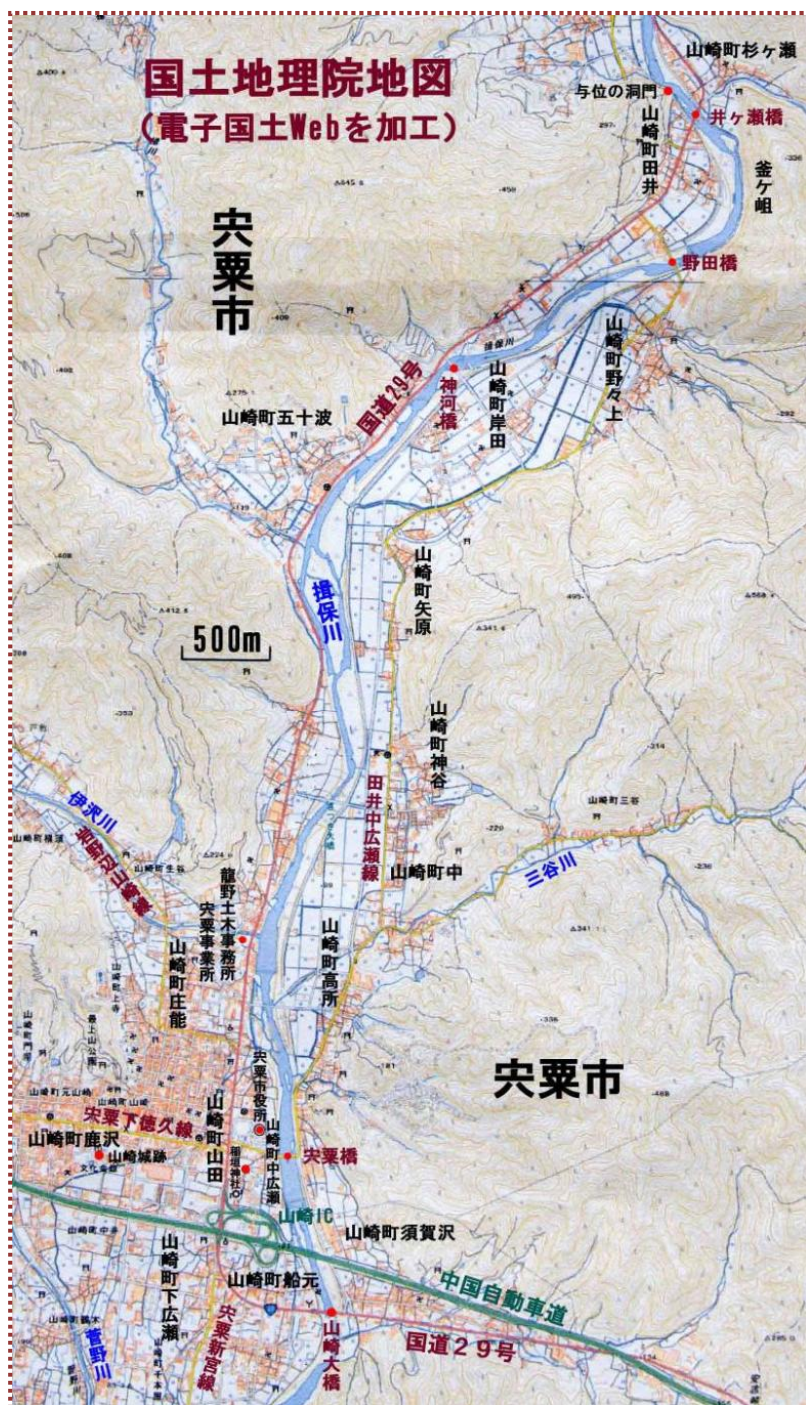


図-1 山崎大橋から井ヶ瀬橋間の地図

昭和 40 (1965) 年 4 月 1 日道路法改正により一級・二級区分が廃止、一般国道 29 号 (姫路市 ~ 鳥取市) として指定施行され、現在に至っています。

国道 29 号の整備は、昭和 32 (1957) 年より一次改築事業 (直轄施工) として取り組み、昭和 42 (1967) 年に改築工事が完了、同年に国道 29 号完工式を一宮町 (現・宍粟市一宮町) にて挙行しています。

なお、昭和 40 (1965) 年 2 月、宍粟橋の下流約 900m の地点に山崎大橋 (鋼合成箱桁橋、40m×3 径間、幅員=7m) が竣工し、国道 29 号は山崎大橋を通る現ルートに移行、宍粟橋を通る道路は県に移管されました。

■ 宍粟橋の歴史

出石の渡し跡に架けられた宍粟橋の歴史についてまとめてみました。

① 初代宍粟橋

明治 18 (1885) 年頃、因幡街道・出石の渡しのところ橋が架けられます。この橋が初代宍粟橋 (木橋) ですが、この時点では国道橋ではありません。明治 19 (1886) 年 11 月 9 日に国道 22 号が現在のルートに変更された際に宍粟橋が国道に編入されています。この出石の渡しの下流約 800m の位置に「船元の渡し」があり、参勤交代の御一行様はこの渡しを利用していたそうです。「格」としては船元の渡しの方が上ですが、なぜ出石の渡し場に橋を架けたのでしょうか。恐らく、この時点では揖保川の舟運もまだ盛んだった (大正末期から昭和初期にその役割を終えている) ので舟運の起点である出石の船着場に近い地点に橋を架けたものと思われる。

② 二代目宍粟橋

明治 35 (1902) 年 12 月、二代目宍粟橋が国道橋として架けられています。写真-6 を見ると、橋の右側の親柱には「宍粟橋」、左側の親柱には「明治三十五年十二月」と書かれています。

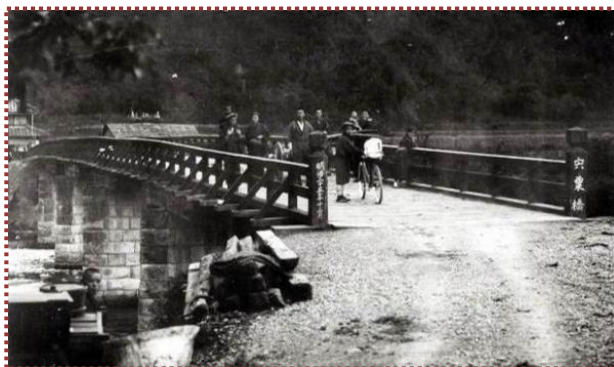


写真-6 明治時代後期の二代目宍粟橋
(「郷土の歴史と古城巡り〜宍粟橋」から引用)



写真-7 宍粟橋の渡し初め風景
(宍粟市教育委員会提供)

③ 三代目宍粟橋

写真-7 は、昭和 9 (1934) 年 3 月 25 日に完成した三代目の現・宍粟橋の渡し初め風景で、橋を渡ろうとする大行列が続いています。川向こうの右手には、郡是 (くんぜ) 製糸工場の高い煙突から煙が立ち昇っています。

また、宍粟橋の左 (下流側) にほんの少しですが木橋の橋脚の一部が写っていますが、これは二代目宍粟橋ではないようです。何らかの原因で二代目宍粟橋が流失し、代わりに架けられた仮橋なのかも。

■ モノローグ

揖保川に舟運が開かれたのが元和年間 (1615~1624 年) なので、同じ頃、あるいはそれ以前に出石の渡しが置かれていたと思われます。舟運の起点である出石の河岸は兩岸に船着場があったので、兩岸を結ぶ渡しは、本通りが川東道から川西道に移って以降も、重要性が低下したとはいえそれなりに利用されていたはず。

一方、前述のとおり、この出石の渡しの下流約 800m の位置に慶安年間 (1648~1652 年)「船元の渡し」が置かれ、姫路方面に行くにはこの渡しを利用していたそうですが、イマイチ位置づけが判然としません。

今回は、この「船元の渡し」についてまとめてみようと思います。

セイヨウヒキヨモギ（西洋引蓬）

ハマウツボ科セイヨウヒキヨモギ属の1年草で、花期は5月から6月。ヨーロッパ原産の帰化植物で路傍や土手に咲く。まっすぐ直立してなかなか見事な立ち姿である。在来種の「ヒキヨモギ」と同様、自らも光合成をすると同時に、他の植物の根に自分の根を入れて栄養を横取りする半寄生植物だが、ヒキヨモギが絶滅危惧となっているのとは違い猛烈に勢力拡大中。全体に腺毛が多く、触るとべたべたする。穴栗橋下流の左岸堤防上で撮影。その後、現地を訪れると、堤防上に繁茂していた草は河川管理者によりきれいに除草されていました。



写真-8 セイヨウヒキヨモギ

【参考資料】

- 1 『山崎町史』 山崎町史編集委員会編 昭和52年4月
- 2 『日本歴史地名大系・第29巻』 今井林太郎監修・平凡社地方資料センター編 平成11年10月
- 3 『地名由来「井内・横山・倉床」 「郷土の歴史と古城巡り」ブログ 令和元年11月
<https://blog.goo.ne.jp/takenet5177/e/35c2be64312896b361669c7999e76f94>
- 4 『穴栗橋』 「郷土の歴史と古城巡り」ブログ 令和元年10月
<https://blog.goo.ne.jp/takenet5177/e/cbdb81f9cb645c78ef8ce7987a9e4478>
- 5 『国道29号の歴史』 国土交通省近畿地方整備局姫路河川国道事務所HP
https://www.kkr.mlit.go.jp/himeji/torikumi/road/about/his_r29.html
- 6 『一宮町史』 一宮町史編集委員会編 昭和60年3月
- 7 『山崎藩、因幡街道、国道29号』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 8 『セイヨウヒキヨモギ』 「山川草木図譜」HP
<https://neko-net.com/hana/archives/18672>

※発刊：令和6（2024）年8月 『ひょうご水百景』 No.202

改訂：令和8（2026）年8月 『ひょうご水百景』 No.202